書評

A・L・モートン「ロバート・オウエンの生涯と思想」

A.L. Morton, The Life and Ideas of Robert Owen, Monthly Review Press, New York, 1963.

本書はロバート・オウエンに関する一種の Readings であり、「原典オウエン研究」とでも称すべき内容の書物である。

古典は一般に語られることのみ多く読まれることが少いとされている。オウエンもその例にもれない。否むしろ、読まれることの少い点では他を遥かに抜んでているといえよう。コールが一九二七年にオウエン著作集[1]を編んだ時、事態は既にそうであった。彼が、オウエンの膨大な著作の中から、「新社会観」と「ラナーク州への報告」を含む最良の十篇をえらび、エブリマンズ・ライブラリーに収録したのは、何よりもまず、オウエンを読みやすい形で社会に提示する為であり、又、重複、前後撞着、表現の不備の多い彼の著作から、人類への貢献を誤りなく読みとれるようにするためであった。

(1) A New View of Society and Other Writings with introduction by G.D.H. Cole, Everyman's Library, 1927.

モートンの本書の目的も、コールと基本的には同じと見ることが出来る。本書は、オウエンの生涯と思想を時代を追って解説する第一部と、主としてオウエン自身の著述からの抜萃を時代と問題とを基準に分類、収録した第二部とからなる。第一部は、第二部の理解を助けるための Introduction ではあるが、それ自体が非常によくまとまったオウエン入門になっており、新研究は特に見られぬが、オウエン研究の手引として価値の高いものである。以下、まず第一部を紹介し、次に第二部に収録された原典の一覧表を提示して、利用に資したいと思う。

第一部は十章からなる。第一章では、オウエンがマンチェスターで職についた一七八八年を中心に、当時の産業革命の模様が若干図式的ではあるがよく整理された筆で示される。産業革命の花形部門ともいうべき木綿工業のこの時期における飛躍的拡大の主たる理由として彼のあげるところは、第一にハーグリーブズ、アークライト、クロムプトンらの発明であり、第二に、羊毛工業と異なり伝統のわくに束縛されるこ

とのない若い繊維工業部門であったこと、第三に、木綿製品の安価さと大量生産、大量輸出に向くという特性である。これに加えて、蒸気力による紡績機械の出現と蒸気機関の採用による工場の山から都会への移転。かくしてイギリス社会には新しい時代の荷い手としてのブルジョアジーとプロレタリアートが形成され、これまで政治機構の独自性を誇っていたイギリスは経済的にも他を圧する独自の構造と力とを持つにいたる。この叙述は、モートンが既にその前者 A People's History of England, 1951. で示したところであり、更にその源流をたどれば、マルクスが主に資本論で明示したものである。モートンが、イギリスの経済史及び労働運動史研究者としては極めて稀な、マルクスの立場にたつ学者であることは、わが国でも周知のことであるが、本書においてもその立場は一貫して示されている。後にも述べるように、本書の導きの糸になっているのはエンゲルスのオウエン評価である。マルクスシストの側からするオウエン研究が日本を除いては殆んど見るべきもののない今日、モートンのかかる立場は、本書を極めて特色のあるものにしているのである。

第二章では、オウエンの誕生（一七七一年）から、ニュー・ラナーク工場を経営する一八〇〇年までが、自伝に基いて概説され、第三章では、ニュー・ラナークでの成功を、彼の〝環環と性格〟に関する独自の見解―一八一三年に新社会観で提示された彼の基本思想―の実践がもたらした唯一の光輝に満ちた例として描かれる。しかし既にここで、モートンは、オウエンの最大の欠陥、即ち環境を真に変革できるのは労働者自身の努力と闘争であることを理解できなかったこと、又、労働者を理解しきれなかったばかりか、支配階級の心を見抜くことも遂に出来ず、終生、彼らの仁愛に期待し、彼らを説得できると信じ続けたこと、を批判的に指摘する。

第四章ではオウエンの最大の功績の一つともいうべき児童教育のニュー・ラナークにおける成功と木綿工場での児童労働を保護する一八一九年工場法の成立が紹介され、同時に、同法の骨抜きにされる経過と、オウエンの失意とが示されている。著者によれば、オウエンは労働者を「子供を扱うように」扱ったのであり、又、彼が成功をおさめたのは常に子供の扱いにおいてであった（p.78.）。

第五章はナポレオン戦争終結に伴う難況、特に、増大する失業の救済策としてのオウエンの「計画」が下院委員会で棚上げにされる経過、及び、ニュー・ラナークでの成功に基く新社会観の名声と上流社会からの支持が一八一七年を境に消えてゆく姿、更にニュー・ラナーク工場からのオウエンの引退が扱われる。上流社会からの支持の喪失を一八一七年八月二十一日の宗教批判演説に起因すると見るオウエン自身の見解に対して、著者は、それが、私有財産・宗教・ブルジョア的結婚制度に対するオウエンの三面攻撃に起因すると見るエンゲルスの見解を、より真相に近いものと高く評価している。

第六章は一八一九年に設立されたオウエン主義社会建設基金募集のための委員会（リカードもそのメンバー）の宣伝活動と成果、ニュー・ハーモニイ村建設と失敗が扱われ、失敗の諸原因が検討される。原因の第一は、息子R・ディル・オウエンが指摘した如く、参加希望者を選択せず、様々な人間を抱えこんだことであり、第二は、筋肉労働が出来ず、かえってそれを卑しむような中産階級の知識人を重視しすぎて、彼らと労働者出身のメンバーとが協力できなかったことである。――この第二点と基本的には同じ問題が、一八四五年のクイーン・ウッドの失敗についても指摘されている（p. 49）、オウエンは失敗から多くを学ぶことの出来ぬ人であった。――著者によれば、第一の欠陥は、環境と性格についてのオウエンの極度に単純で安易な見解の産物である。しかし、独学でしかも新聞の類以外には体系的な著述を殆んど読まなかった（p. 17―18）オウエンには、自分の信念を反省し、再検討する知的余裕もなく、参照すべき書物も手にしえなかった。計画に誤りはないと確信する彼は、以後、計画を実現する手段を求めて労働組合運動その他に加わることになる。第七章では、まず、オウエンが留守にしていた間のイギリスでの労働運動の高揚、トムスン、ホジスキンら初期英国社会主義者の活躍が示される。帰国したオウエンにとって、「社会主義運動」を、自分と対等な多くの指導者たちと協同し、討論しながら進めてゆくということは、全くのところ、始めての経験であった。これまでオウエンは教祖であり、他は全て彼の命令を実行する存在でしかなかった。この限りでは〝運動〟は未だ本来のものではない、しかし、トムスンがオウエンの計画と搾取説とを結合した時（p. 36）、オウエンの〝計画〟は搾取廃絶を意味するものとなり（ibid）、彼の運動は労働者階級への外からの呼びかけから、新たに労働者階級そのものの運動へと発展していったのである（ibid）。これは、まず、一八二六年頃から、協同組合運動としてあらわれる。周知の如く、オウエンは最初これに批判的であった。何故なら、彼の計画は数年にして全世界を変革する程に雄大な規模のものであって、まず小売部門の協同組合化から始めて資金を貯え、やがて協同組合社会を作りあげる、などという倭少なものではなかったからである。やがて、オウエンは協同組合運動に加わるが、この当初の批判は後々まで保持され、運動方針をめぐるオウエンとトムスンの対立をひきおこすことになる（この点は Pankhurst, K. R. P., William Thompson, 1954. に明らかであり、著者も専らこれを典拠にしている）。本章にはこのほか、労働切符制度の経過とその失敗の検討も若干行われている。

第八章では労働組合指導者としてのオウエンが描かれ（しかし、オウエンは遂に労働組合についての十分な理解をもちえなかった。皮肉なことに、ニュー・ラナークの労働者は政治的には遅れており、全然組織化されていなかったのである

—p. 38—)、G.N.C.T.U. 樹立、階級闘争を否定する彼の見解と他の指導者達との対立、新組織 The British and Foreign Consolidated Associaton of Industry, Humanity and Knowledge の設立とそれによる階級調和の主張、G.N.C.T.U の崩壊、これを期にオウエン主義が労働運動の主流から離れていった経過などがスケッチされる。モートンの立場からすれば、この時期のオウエンには批判さるべき多くのものがある。然し、著者は、オウエンの積極的な貢献の一つが、イギリスの大衆にはじめて、社会主義の観念を植えつけたことにあることを明示している。

この時期のオウエンは既に六〇才をこえていた。この六〇年余の生涯に彼は、「社会主義思想家、開明的な産業家、工場改革者、教育の先覚者、協同組合運動の創立者（これは意図的なものではなかったが）、労働運動史上の一大画期の指導者」(p.47) として活躍してきた。どの一つをとっても十分歴史に残るかかる大きな仕事ののち、彼は更に二十年余にわたって協同組合社会樹立のために活動を続けるが、それは、既に、一つの宣伝活動にすぎず、しかも、年を追って抽象的になり現実から遊離してゆく体のものでしかなかった。このことは、先の新組織の名称が、一八三五年には Association of All Classes of All Nations, になり、三九年には Universal Community Society of Rational Religionists, となっていることにも示されている。第九章は、晩年のかかるオウエンの姿を、深い同情と尊敬をこめながらも鋭くえぐり出している。本章末尾に記されたオウエン自身の言葉、I have been ahead of my time. に、私たちはオウエンの感慨と偉大な先覚に対する著者の敬意とを読みとることが出来る。

第十章で、われわれは、著者のオウエン評価が、「反デューリング論」でエンゲルスの明示したところに負うものであることを知る。著者は、「イギリス労働者階級の状態」で若きエンゲルスがえぐりだしたオウエン主義の否定的側面—チャーチズムを批判し闘争を否定した立場—が、晩年のエンゲルスの評価にはあらわれておらず、逆に、一八七〇年代のイギリスにおける社会主義の再興という現象を前にして、エンゲルスがオウエン主義の積極的側面をマルクス主義の先駆的一形態として評価していることを指摘する。モートンのオウエン評価も正にこの点でなされているのである。

以上の如き第一部の内容は、先にも記した如く、決して新研究を呈示しているものではなく、いわば、従来のオウエン研究を手ぎわよくまとめたものである。わが国の現在の研究水準から見ても、経済理論の取上げ方がエンゲルスそのままに留り (p. 88—95)、その歴史観、国家観との理論的思想的つながりが全然問題として意識されておらぬ点など幾多の不満を抱くことは出来る。しかし、オウエンが遠く過去の人となり、ごく少数の研究者以外には殆んど顧みる者もない現況の下では、本書の啓蒙書としての役割は非常に大きいといえ

よう。何故なら、疎外状況の克服が叫ばれ、又、社会主義の多様性が論ぜられている現代は、オウエンらの思想に大きな示唆を見出すことが可能な筈であるから。更に、次の一覧表から明らかなように、文献を入手しにくいわが国では、本書は研究者にとっても甚だ貴重な書物となるであろう。

次に第二部の構成と抜萃の原典を掲げる。（書名は括弧内に記し、重複する場合は原典に付した番号を用いた）。

Part Two, SELECTED WRITINGS

Ⅰ. First Principles : Human Nature and Environment (① A New Vew of Society, 1813. ② An Address to the Inhabitants of New Lanark, 1816. ③ The revolution in the mind and practice of the human race, 1849. ④ A catechism of the New View of Society and three addresses, 1817)

Ⅱ. Boyhood and Early Life (⑤ The life of Robert Owen by himself, 1857.)

Ⅲ. Owen at New Lanark (①,③,⑤)

Ⅳ. The Industrial Revolution (⑥ Observations on the effect of the manufacturing system, 1815. ⑦ To the British Master Manufacturers, 1818. ⑧ Report to the Committee for the Relief of the Manufacturing Poor, 1817.)

Ⅴ. Economic Theory (⑨ Report to the County of Lanark, 1821. ①及び①の Address prefixed to Third Essay. ④)

Ⅵ. Owen and the Factory Children (①, ⑤及び⑤の A Supplementary Appendix to the First Volume of the Life of Robert Owen, 1858. ⑩ On the employment of children in manufactories, 1818. ⑪ Threading my way, by Robert Dale Owen, 1874.)

Ⅶ. Pioneer of Education (①,⑤,⑧)

Ⅷ. Owen as a public Figure (②,⑤,⑫ Robert Owen's Millennial Gazette, No. 11, August lst, 1857)

Ⅸ. Revolution by Reason (⑬ An address to all classes, sects and parties, 1840. ①,②,③,④,⑤の Supplementary Appendix, ⑭ A Dialogue in three parts, between the Founder of The Association of all classes of all nations' and a Stranger, 1838. ⑮ An Address to the Working Classes, 1819.)

Ⅹ. Owen's Plan (③,④,⑧,⑨,⑯ Further Development of the Plan for the Relief of the Poor and the Emancipation of Mankind, 1817.)

Ⅺ. Some Features of the Plan (①,③,⑤,⑨)

Ⅻ. The Trades Union(⑰ A manifesto of the productive classes of Great Britain and Ireland, to the gove-

nments and people of the continents of Europe, and of North and South America, May 13, 1833, ⑱ Address to the Operative Builders, August 26, 1833. ⑲ Friendly declaration of the Delegates of the Lodges of the Building Branches of the United Kingdom,…… September, 1833, ⑳ The Legacy of Robert Owen, To the population of the world, March 30, 1834. ㉑ A Lecture, April 27th, 1834)

XIII. Owen on Relgion (①,③,④,⑤,⑪)

XIV. Marriage and the Family (㉒ Lectures on the marriages of the priesthood of the old immoral world, 4th ed., 1841. ③.)

XV. A Plan for India (⑤の Supplementary Appendix,)

XVI. Eccentricities (③,⑤の Supplementary Appendix, ⑫,⑭)

XVII. Some Contemporary Estimates of Robert Owen (Francis Place, from Graham Wallas, Life of Francis Place; William Cobbett, Political Register, August 2, 1817; William Lovett, Life and Struggles; George Jacob Holyoake, History of Co-operation; Phillippo Buonarroti, Bronterre O'Brien; Buonarroti's History of Babeuf's Conspiracy, translated by Bronterre O'Brien; Friedrich Engels, Condition of the Working Class, Anti-Dühring;)

(上野 格)